

## 崔書勉先生と私

西崎 浩之

関東を離れたのは、一〇年以上前。山口県に六年、兵庫県に五年。

崔先生とその周りの素晴らしい先生方のお話を伺うのを楽しみに、日韓談話室に参加させて頂いたことを、今でも懐かしく思っております。

深く強い専門分野がないわけでもなく、発言や講演をする立場にはなく、唯々、皆様のお話を聞くばかりで、いつかは、私も何か講演できればなと思いつながら、何もできずに、今に至っております。

崔先生のお話の中で、「伊藤博文を射殺したのは、本当に安重根か？」というものがありません。今まで、韓国の至る所で「安重根義士」とたたえられ、安重根が伊藤博文を射殺したことは、歴史的事実として語り継がれています。なのに、なぜ。

私の、受け取り方が間違っているかもしれませんが、一つ一つの日韓関係史上の出来事を、客観的に、多角的な視点で分析して、「本当に正しいのか？」を検証することが、正しい歴史認識を形成していくうえでとても重要で、先生は、そのことを皆さんに伝えたかったのではないかと受け取りました。

現在、日韓関係の中で、様々な歴史認識の差異がもとで、両国に軋轢が生まれています。お互いが自らの持論が正しいと議論が平行線をたどってしまっています。主に「日帝三十六年」の間に起きたことにつき、両国の論客が持論を戦わせていますが、論戦は収束に向かっているとは言えないのが現実です。

残念ながら、すでに、「日帝三十六年」を生きた人々の多くがお亡くなりになっており、当時を知る人の証言を、いよいよ得ることが難しくなっております。当時何が起きたのか、地に足がついた証言をしていただける方がいなくなれば、歴史的事実の検証も、「空想化」に走ってしまうリスクが出てきます。

その「空想化」に、歯止めをかけるのが、我々のすべき仕事ではないかと思っております。日韓関係を多角的に見る。そのためには、目の前の著作物を鵜呑みにせず、韓国人の立場に立つたら、どう思うか、また、中国やロシアからみたらどう思うか。そうした分析を習慣づけて、後世に伝えられたいなと思っております。

また、「日帝三十六年」そしてその後も続いた戦乱の時代を韓半島で暮らしていた人たちは、命がけで生きてきました。なぜ、韓国の国民感情は、これほどまでに、激しく燃えるのか。「命がけ」で生きてきた先人たちの背中を見て育ち、様々な疑問が生まれた中で、日本に対しても、意見を投げかけてきたのかと思っております。

我々日本人の先人たちも、第二次世界大戦で、多くの辛苦を伴いながら、厳しい世の中を生きてきたと思っております。後世を慮りながら、お国の為に戦地に赴いた若き軍人も多かったです。日本も韓国も、その当時の先人は厳しい世の中を一生懸命生きてこられたと思っております。

四十代を生きる一人として。

飽食の時代を生きる一人として。

一生懸命苦しみながら生きてきた先人たちの思いを受け継ぐには、先人と同様に、粉骨砕身命がけで生きることではないかと、最近思い始めております

家と会社との往復だけ、惰性で流すサラリーマン生活から脱却し、自ら課題を課して、日韓関係の勉強を続けていけることができればいいなと思っております。

一生懸命勉強を続けていくことで、同世代の韓国人から共感を得られるよう、頑張っていければいいなと思っております。

